

佛典における相好觀の研究Ⅲ

——梵摩經に見える廣長舌相の成因について——

嶋 善 一 郎

梵摩經は中阿含第四十一卷に收集せられてある比較的短い經典であつて、いわゆる阿含部外經典として收集せられてある梵摩喻經とは、同經異譯の關係にあり、梵摩經の方が少し長文であるが、所收の相、即ち三十二相の點については殆んど同一の形である。梵摩經典における相好觀説述の因縁は、同じ阿含部經典における他の相好觀説述の事情と異なり、釋尊が三十二相を具有していられることをバラモン長老が傳聞し、その眞偽をたしかめるために、バラモンの秀才青年を釋尊のもとへ探索につかわしたが、バラモン青年は三十相をたしかめることが出来たものの、餘の二相即ち廣長舌相と陰馬藏相の二相は確認しがたく、困却しているのを釋尊が察知して、如其像定を現じ、三十二相ごとくを觀察することが出来るようにしたので、バラモン青年は目的を達し、その結果を長老に報告したことの顛末によつてこの經典は成立しているのである。三十二相中には觀察不能相は他にもある

にかかわらず、此の二相のみを分離して不見藏相としたのは何故であろうか。これは考えさせられたところであつた。陰馬藏相については著書（未刊）にゆづることにして、ここでは廣長舌相についての考察を記するに止めたい。

一

廣長舌相を三十二相の一つとして記載してある經典は、原始佛教經典のみならず、大乘經典においても、三十二相の説かれてある部分においては、殆んどすべて省略されることなく説かれてあるが、その成因について説かれたものは見當らず、全く不可解という外はなかつた。此の一相は三十二相中でも特に奇異の感を抱かせる相形である。廣長舌相は、廣くて長い舌の形態學的表現であつて、（細くて長い舌としてある經典もある）舌を口から延べ出して上方に向けると面貌を被覆し、側方にまげて延出すれば、耳垂を舐めることが出来る

というのであるから、正常人の舌の形態でないことは勿論である。

三十二相八十種好は佛教では瑞相として尊ばれ、これを具有している人が俗人であれば轉輪聖王となり、又鬚髮を剃除し袈裟衣を着し、出家して至心に學道にいそめば、正覺を成就し、佛となるは必至とされているからには、瑞相として讃仰されるのも當然であろうが、さてこれを實際に人が具現していたとすれば、觀る人にどんな感じを抱かせるであろうか。三十二相等というものは瑞相どころか怪物の相である、釋尊は奇形兒であるこれ等の相好を具有している人を讃仰する等ということは、狂氣の沙汰であると極言する者すらある。

一つの相について、佛典においては如來の相であり瑞相として讃仰せられ、しかも一方現代科學の洗禮を受けた者からは、怪物であり、狂氣の沙汰であるとされるすらある。その餘りにも兩極端になるへだたりに、考え込ませられたものであつた。

舌が廣くて長いということについて、これは無限に、最上の説法をする可能性を示すものとしての解釋が見られる。

溪聲便是廣長舌 山色寧非清淨心

これは蘇軾の詩に見られる一句であるが、蘇軾もまた廣長舌相を音聲に關連せしめた、別言すれば聽覺による所收とし

て解釋している。またよく辯舌の立つ論述についても、廣長舌をふるう等と評し、巧みな抗辯や誇張表現に對し、舌長き申し條等とされるものがあるように、何れも舌が長い、ということとは舌がよくまわり、巧みに言語表現が出来ることを、良い意味にも悪い意味にも使われて來ている。これは必ずしも佛教の影響下にある人人の間のみならず、佛教には關係をもたない白人の間でも、男よりも女の方が少し舌が長いという喩えが行なわれていることも聞いた。これに反して言語が明晰でない者の言語を舌足らず、と評している。狹喙の人の言語も明晰でなく、舌が短かく、肥厚している人の言語も明晰を缺くのは事實であるが、舌が長いが故に快辯であるという實驗例はまだ經驗した事がない。然らば舌の長さは正常では何程かということになると、これは實際では頗るの難問題に屬する。舌は本來軟肉質の器官であるから伸縮せしめることが出来る。靜止状態における形態を計測するということは全く不可能ではないにしても、正確を期することは困難である。然し如何に伸展せしむればとて、普通の人においては舌、面貌を被い、或は側方伸展をして自らの耳垂を舐る等という所作は出来るものではない。ただここに忘れてはならぬことは、舌は本來ある程度迄は伸縮可能なる肉質の器官であるということである。

二

人には、それが文明社會人であつても、また原始的生活を營んでいる人の社會においても、その身體の一部分を毀傷し、或は加工粧飾するという習俗がある。この伸縮自在の肉質の器官を人工的に變形するという古俗が印度においてあつたのはあるまいかと思つて佛典を探索して見たが、舌を吐く習俗の記載はあるけれども、舌を伸展せしめる具體的方法を記載した文獻は未だ見出し得ないでいる。然し印度の古俗として、今も残されている、ヨガの行法の内にこの舌を伸展せしめる習俗が残つていることを知ることが出來た。ヨガ行者のいうを聞けば、ヨガは五千年以來から行なわれているが、佛敎經典に取り入れられたものの外、主な古文獻は殘されていないとしている。

苦行は釋尊が發心當初試みられた行法であることは多くの佛典に見られるが、その具體的方法は明確でない、單なる斷食行等は苦行の中に入らないもので、食を求めて得ることが出來ない時には空腹感から苦痛を覺えるが、これも時間の問題でやがて解消する。身體にむしろ快適感をすら誘起することであるから、本質的な體形的苦行ではない。

三

廣長舌相を具現するのは、ヨガの行法中では生命に危險の伴なう冬眠行法を行なうために必要な形態であつて、印度における現在のヨガ行者の冬眠生き埋め實行者であるマダメ・スワミの言として、沖氏はつぎの様に記している頤部を越す長大な舌を見せながら、「この舌で自由に、意識的に氣管をふさぎ、空氣の通る道を少しあけておくと、ひじょうにゆつくりと呼吸が出来る。呼吸がゆるやかであれば酸素の消耗量は少なくてよい。」と。

これは不合理なことではない。三、四週間も生き埋めになるには勿論廣長舌相のみではなく、豫備的な或は前提的な身體的條件が伴わなければならぬことは勿論だが、呼吸運動のみならず、筋肉、血行、神經の活動もすべて殆んど休止一步手前の狀態に迄、極端に遲緩せしめることが出來なければならぬ。これをやるためには子供の時から初めて、約三十年の訓練が必要であるという。そしてそのために重要となるのは呼吸法であり、その特殊な呼吸法を實行するために、舌の裏のスジを切除して舌を引つぱり、四、五年かけて舌を長くのばすのだ、と説明している。生き埋めの行法から生環すれば聖者として尊崇せられることを物語つてゐる。

生命に危險が伴うような、また身體の一部毀傷を必要手段とするような習俗は、近世に至つて突如として發展したものでなく、古俗であつて、いわゆる苦行法の一つであらう

ことは容易に考えられる。かかる行法が現在の人人にとつては餘りにも日常の生活様式とかけ離れているからといつて、不可能だと断定しざる根據は見出せない。ただ何等豫備的諸條件の完了なしに、突然生き埋めの如き状態におかれた場合に、人は當然死の轉歸をとらざるを得ないであろう。普通人では不可能と思われることを實行すると、單純な考え方しか出来ない人人の間では、畏敬の對象となるであらうことは容易に考えられる。聖者扱いをされるのも當然かもしれない。

五千年以前から繼續傳承せられているといつているヨガの行法について、佛典が成立せられてから今日に至る迄の行法に關する繼續文獻を探し當てることが不可能であつたが、ヨガの行法に文獻が残されているのは佛典に攝り入れられたものが大部分で、他に見出し得ないというのは、行法は身體的經驗を重ねて行くより外、體得の方法がない性質のものであることがわかる。體得者は體得傳承の方法をとり、文獻としては残せない關係もあつたであらう。

四

釋尊も初め苦行實踐者の群に入り、實踐六年といわれるのを見れば、相當各種の方法を試みられたものと思うが、ついに開悟の道にあらずとされ、苦行道を離脱せられた後、正覺を成就せられたというのは身體的には妥當な方法に轉換せら

れたと思う。然し後日、これらの苦行者の群れから釋尊の會下に參じた者のあつたことは、佛傳にも見えるところである。

釋尊の出現以前より苦行者の存在するあり、釋尊もその實踐經驗者であり、釋尊の會下にも苦行者の群れより轉向して參じた者があつたことを思えば、釋尊が苦行や占術や呪術に對して、否定的に敎示せられたとしても、苦行だとか占術或は呪術というようなものは、相互にその限界が明らかでないものもあるから、釋尊の滅後、經典の結集が行われるに際しては、明確に否定的態度を示されなかつた既存事項が經典中に挿入せられるようなことは當然あり得ることである。三十二相觀それ自體が、釋尊の出生以前すでに一應の完成を示していたもので、釋尊の創説ではないことは今迄に再三言及したところ、いくつかの思想系統のうち、人の體構に關する特殊性のあるものや、美、強、巨大、其の他の願望形態や實存形態のある種のが、母思想系統の區別なく集約攝取せられたものと見られる。ヨガの行法中には今日ではシヨウ的體技と見られているものもあるが、それは脱線形態であつて、本質的には人の生命の本源を開明せんとする意圖が底流となつていのであるまいか。バラモン青年の不見二相はこうしたヨガの行法中から佛典に攝取せられたものと思われる。